

## 《ラブソングを聴きながら》【夜さろん第8夜】

2013.11.15 @ 原宿

While listening to love songs ...

本を読む、絵画を見る、イヤホンで音楽を聴く。これらはすべて「凝視する」行為だといえます。

イヤホンから流れるラブソングを聴きながら、そこに“情景”や“具体的な空間”、“過去に訪れた場所”“アノ人”などのディティールを想像しているではありませんか。お気に入りのラブソングであるほど、この傾向も強い気がします。

どうして、わたしたちは懸命に、対象を凝視し続けてしまうのでしょうか。凝視する行為を検討する（＝凝視する）ことで、文学や芸術が、いかに視覚に牽引されてきたか、もう少し考えてみたいと思います。歌詞カードを見つめながらお気に入りのラブソングに耳を傾けたあの頃…。

活字（歌詞カード）と映像（イメージ）で恋愛世界を「凝視する」うち、5分間の短い時間に展開される歌の世界（あるいは歌手）と一体化したかのような情緒的な満足が得られる…。これこそが凝視の効用で、これこそはラブソングが成立させる力になっているのと考えられます。

ところが、アートは奥深いものなので、必ずしも凝視が理解を深めるわけではないかもしれません。「見ようとする意志」が散漫だか

ら、却って見える（感じられる）真実もあることでしょう。また、歌詞の言葉は、意外と目を凝らすほどにすり抜けていくものでもあります。

今宵はこんなこともアタマの片隅にすこし留めながら、でも全体的には、みなさんのお持ちいただいたラブソングの世界にトコトン浸りたいとおもいます♪

### 【Menu】

#### 1：聴きなさい/ Listening

- ・ラブソングからキーワードを抽出してください
- ・Good ポイントともう一步ポイントを挙げてください

#### 2：歌いなさい/ Singing

- ・オーディエンスに1フレーズ、届けてください
- ・情熱を込めてください

#### 3：ブック交換しなさい/ Exchange your Gift-book

- ・贈られた本の情報をシェアしてください（閉会後に）

【ブック交換会】キーワード&ブックリスト

先達からの贈物	☞	『海からの贈物』 アン・モロウ・リンドバーグ（新潮社文庫、1967）+α
師匠と弟子と	☞	『赤めだか』 立川談春（扶桑社、2008）
日本橋、ミステリー	☞	『新参者』 東野圭吾（講談社文庫、2013）
私の好きなまち、僕の好きなうた	☞	『ショートソング』 柘野浩一（集英社文庫、2006）+α
進化の可能性	☞	『聖なる予言』 ジェームズ・レッドフィールド（角川文庫、1996）
鳥のラブソング	☞	『言葉の誕生を科学する』 小川洋子、岡ノ谷一夫（河出ブックス、2011）
小さな物語の大きな楽しみ+α	☞	『はじめての文学 川上弘美』 川上弘美（文藝春秋、2007）+α
恋愛って、いいよね	☞	『グレイプフルーツ・ジュース』 オノ・ヨーコ（講談社文庫、1998）+α

※参考



『BRUTUS (ブルータス) 2013年 11/15号』

特集：<ラブソング> 心に響く、愛の言葉。

出版社：マガジンハウス；月2回刊版

発売日：2013/11/1

[http://magazineworld.jp/brutus/766/#tab\\_mokuji](http://magazineworld.jp/brutus/766/#tab_mokuji)



—Love Songs—

	楽曲	ひとこと
1	「星影の小径」 ちあきなおみ 作詞：矢野亮 (1950年)	"付かず離れず ほどよい熱さ 見つめていないわけじゃない これが大人の包み込む愛 (歌うのは むずかしーです)" 昭和のムード歌謡の雰囲気もあり、オトナの女の艶と余裕を感じます。
2	「多摩蘭坂」 RCサクセション 作詞：忌野清志郎 (1981年) *Album『BLUE』収録	忌野清志郎さん、RCサクセション、というと、派手なイメージがあるかもしれませんが、それだけではない、いろいろな楽曲があります。歌詞もすばらしいものがたくさん！日比谷野音でのコンサートが印象深い思い出です。この曲の、かなしい、と、いうよりは、切ない感じがとても好きです。
3	「for you …」 高橋真梨子 作詞：大津あきら (1982年)	高橋真梨子が好き。声が特に好き。その中でもこの曲が好き。歌詞は恥ずかしいくらいベタなものである。中年の恋っぽい。だから、直截的。 実は歌詞よりもメロディが好きなのです。
4	「Yes-Yes-Yes」 オフコース 作詞：小田和正 (1982年)	初めて聴いたときに鳥肌が立った感じを今でも覚えている。以来ずっと聴き続けている、自分にとって大切な一曲。同音源は、シングル版、アルバム版、ライブ版とすべてアレンジが異なるので聴き比べるのも一興です。
5	「M」 プリンセス プリンセス 作詞：富田京子 (1988年)	記憶の中で、ラブソングだと意識してききたいちばん古い曲。カセットテープで何回もきいて歌っていた。
6	「すばらしい日々」 ユニコーン 作詞：奥田民生 (1993年)	出会いは昔過ぎて覚えていません。特別ユニコーンが好きだったとかということもないのですが…。矢野顕子さんがカバーされていて、それが大好きでよく聞いてました。 実はラブソングかそうでないのか、ファンの間でも意見の別れる曲でもあります。

7	「ナナへの気持ち」 スピッツ 作詞：草野正宗 (1996年) *Album『インディゴ地平線』収録	“何も出来ず”って、何がしたかったんだろう？(疑問) 曲の冒頭と間奏に入る女性の話し声のSEは、遅いピッチでよく聴いてみると、ドキっとする内容です。
8	「愛について」 スガシカオ 作詞：スガシカオ (1997年)	「さろん」にちなんで、眼鏡男子が作った曲を選びました♪ かなり違う雰囲気を持った2曲ですが、伝えたいメッセージは意外に似ている気がします。 “もうすこし愛についてうまく話せるときがきたら”というフレーズが示す愛の(状態の)捉え方がすごく考えさせられます。
9	「たいせつ」 SMAP 作詞：戸沢暢美 (1998年)	当時無敵の国民的アイドルに、市井の一般人の目線を歌わせる、という手の込んだ共感売り出しソング(?)。ただ、歌詞世界はとっても簡潔明瞭&ポジティブに自足していて、世紀末の「小市民的幸福」がどんなものだったかを今に伝えている(ような気がします)。
10	「Drifter」 キリンジ 作詞：堀込高樹 (2001年)	両方(※紹介者は別にもう1曲をご用意)の歌詞を並べて眺めてみて、2つのラブソングに共通する要素は何か? 違っている点はどこなのか?などを皆で考えられたら楽しいかな〜と。 鬱々とした中に、どこかほの明るいもの、力強さも感じられる曲です。
11	「電信」 空気公団 作詞：山崎ゆかり (2003年) *Album『こども』収録	最近いちばんきいている、ラブソングだと解釈しているラブソング。iPhoneで何回もきいて歌っている。 日本語オンリーの、ゆるっとした歌詞は、もしかしたらラブソングではないのかも。でもわたしはそう聴いて楽しんでいます。
12	「痛いよ」 清竜人 作詞：清竜人 (2010年)	2010年代の、若い(当時20歳)ロックンローラーの描く日本語詞は、どこかオーガニックでナチュラル、LOHAS的な自然さ。見事に時代の気分を代弁(してる気がします)。

歌いなさい/Singing

キーワード:【 セカイ 】 【 パッション 】 【 ひとりとふたり 】

ここには来たことがあるような気がする

こんどはいつ、ここを訪れるだろう

# “ラブソングを聴きながら”

(夜さろん「ラブソングを聴きながら」公式テーマソング)

作詞：ラブソングオールスターズ\* (2013)

ここには来たことがあるような気がする  
世界の切岸に僕は一人で立っていた ふたりで絶壁を落ちても僕はいいんだ  
その冗談も聴いたことがあるような気がする  
忘れるの 忘れないの 忘れてるの 忘れてないの

入り口はもう みつからないと思っていたけれど  
ふたりでここにたどりついた  
指先くらいならふれられそうだ そのくらいなら届きそうだ

ここには来たことがあるような気がする  
この唄を聴くとあの日に戻ってしまう あの日ふたりで初めて歩いた街  
キミが食べる姿に見とれていたなら、皿とスプーンが音をたててしまった  
忘れるの 忘れないの 忘れてるの 忘れてないの

入り口はもう みつからないと思っていたけれど  
ふたりでここにたどりついた  
指先くらいならふれられそうだ そのくらいなら届きそうだ

ここには来たことがあるような気がする  
こんどはいつ、ここを訪れるだろう

こんどはいつ、ここを訪れるだろう

\*この歌詞は参加者全員による合作詞です